

GLOBAL'93に出席して

(日本原子力研究所) 水本 元治

1. 会議の印象

核データや加速器等の国際会議に出席した経験からしますと、今回の GLOBAL'93 はかなり異色(ユニーク)であったといえます。会議の開催目的、外部を取りまく状況、討論された内容の詳細な中身については会議の主催者の一員でもある向山さんの説明に詳しく述べられておりますので、ただの一般参加者としての会議の印象(少々無責任な)を述べることに致します。この会議ではプレナリーセッションの大半が米国の施策や、原子力を巡る国際関係などの政策的な報告で占められました。米国の原子力産業の危機に如何に対処するかが会議の主要なテーマであり、核不拡散を補償しつつ原子力の開発を推進する方策が討論されました。原子力推進策を進めている日本及びフランスの現状や計画が紹介され、ロシアの原子力開発への意欲が熱っぽく語られました。また、中国、韓国等のアジア地区からの参加者も多く、今後の原子力が極東を中心に進められるだろうとの植松 OECD/NEA 事務局長の意見も極めて説得力に富むものでした。

国際会議に出席してまず重要なことは、言わずもがなであります。如何に参加者のコミュニケーションを良くするかです。会議の主旨を正しく把握しておくこと、発表内容を理解すること、自らの発表をできるだけ多くの人に理解してもらうことが会議の主たる目的である訳です。この点において GLOBAL'93 は完璧なまでの気の使いようでした。原子力推進キャンペーンの必要性を強調する米国主催者の発表は極めて洗練されており、分かり易く、かつ説得力に富むものでありました。会議では討論の場だけでなく、レセプション、昼食会、ツアー等も含めてことあるごとに多くの人々のスピーチがなされました。スピーチでは最大限に参加者の興味を引きつけるための方法が採られました。まさしく究極の講演ともいえるべき(選挙演説か宗教活動のような調子で)、会場を沸かせるジョーク、数々のキャッチフレーズ、的を得た比喻などがふんだんに織り込まれてただただ感心するばかりです(最も、正直に告白しますと、語学力に些かの問題点のある日本人参加者の一員としては、これらを的確に理解するのはなかなか難しいものがありました)。講演者が使用した OHP の出来映えは見事としかいいようがありません。平易でかつ内容の豊富なタイトルと説明文、写真有り、漫画有りと、OHP はかくあるべきだと言うようなものばかりです。毎朝、会場で手渡される会議のニュース紙では、前日の会議のサマリー、写真入りの招待講演者と講演内容紹介、さてはその反響と至れり尽くせりです。これらの観点からも GLOBAL'93 がかなりユニークなものであることが想像いただけると思います。

しかし、極めて皮肉な見方をしてしまいますと、かくのごとき最高のコミュニケーション

ョン技術を持ってしても、原子力を推進していく上では必ずしも世論や政策決定者の説得において効をそうしていないと言うことが米国の悲しき現状であるのかもしれませんが。

2. シアトルの印象とハンフォード研究所見学

シアトルは米国の大都会としては珍しくきれいで穏やかな町です（数少ない経験からの判断で反論が有りそうですが）。太平洋を隔ててアジアと直接向かい合っているという印象は港に停泊している数多くの日本、韓国、台湾などの船や、積み荷に記された漢字によっても裏付けられます。先日（1993年秋）クリントン大統領の肝煎の会議（APEC）がシアトルで開催されたのもむべなるかなです。GLOBAL'93のツアーは大統領や細川首相が会談を行ったシアトル湾に浮かぶ Blake 島で行われました。焼きサーモンの料理やインディアンの歴史を物語る劇、ボートの上からのシアトルの町の夜景は、会議中のつかの間の息抜きであり、また、さまざまな専門分野（政策決定に参加している人を含む）の会議参加者とのコミュニケーションを図るための貴重な機会でもありました。

会議の最後の日に、主催組織であるハンフォード研究所の見学会が催されました。会議開催地のシアトルからは 200マイル位の距離で内陸側へ入ったところで、バスで3時間半のドライブです。朝の6時にバス2台を連ねてシアトルを出発し、東海岸特有の緑の多い地域を抜けて、高い山々が連なるカスケード山脈を越えると、コロンビア川が中央を流れるコロンビア盆地です。この川の沿岸には豊富な水を利用したリンゴなどの果樹園が延々と連っていました。しかし、一歩川の近傍を離れると広大な砂漠が広がっています。研究所サイトの広大さは極めて印象的で目を見張るものがあります。1,456km²の広さは茨城県の1/4の面積を有し、水戸、勝田、東海、日立地区がほぼすっぽりはいるといったところです。その中で核兵器用プルトニウムの生産が戦時中から管々として続けられてきたわけです。これだけの広大な土地があつてこそ、初めてこの“とんでもないプロジェクト”の推進が可能だったと思われまふ。予測できない事故を想定し、それが他の施設に及ぼすことのないように、遙か彼方から別の場所に原子炉が1つ1つ点々として点在し、その規模は驚くべきものです。しかし皮肉にもこの土地の広大さへの過信が放射性物質の取扱いにずさんさを招き、その処理が今日大きな社会問題となったとも言えることでしょう。ハンフォードでは同時に FFTF の施設と、建設途上の原子炉（WNP-1, 1.25 MW, PWR, 65%完成）の建設現場を見学しました。FFTF の存続はその後の米国政府の動きでは相当困難なものがありそうですし、中断中の原子炉の建設再開も難しいのではないかとこの印象を受けました。ハンフォードのクリーンアップ作戦はかなりの規模で行われており、それらの施設を見学するだけで丸一日が必要だった訳です。ひたすら汚染した土地を掘り返し、新たに処理施設を作るための工事現場を走り回り、ハンフォードのサイトを離れたのは午後の4時過ぎでした。シアトルに再びたどり着いたのはすでに日もとっぷり暮れた夜の7時過ぎ、まずは長い1日ではありました。